



## 眼瞼下垂の病因と治療

### はじめに

形成外科では、体表全域と顔面の外科治療を主体として行っております。体表全域を扱うため対称疾患も幅広く、ほくろやしみなどの皮膚の小病変、母斑や血管腫などのあざ、粉瘤や脂肪腫など皮膚・皮下腫瘍、皮膚癌、唇裂や合多指症などの先天異常、顔面骨の骨折、怪我や火傷・糖尿病性皮膚潰瘍などに対する創傷治癒などが含まれます。

今回は上瞼が下がることにより視野が狭くなる眼瞼下垂症の原因と治療法等について解説します。

### 眼瞼下垂とは？

眼瞼下垂とは、上眼瞼(うわまぶた)が下がります。まぶたが目の黒眼(角膜)を覆うことにより、視野が狭くなった状態です。正常でも上眼瞼は2mmほど黒眼を覆っていますが、これ以上に瞼が下がっている場合は眼瞼下垂と診断されます。

### 眼瞼下垂の症状は？ 頭痛・肩こりと関係？

上瞼が下がることにより視野が狭くなるだけでなく、目を見開こうと前頭筋という「おでこ」の筋肉を使うため、「おでこ」に横シワができたり、中には常に「おでこ」の筋肉に力を入れているため頭痛を引き起こすこともあります。更には、「おでこ」にある前頭筋は頭蓋骨をつつむ帽状腱膜という膜を介して後頭筋という後頭部の筋肉とつながっていますので、眼瞼下垂が肩こりの原因となっている方がいるようです。

### 眼瞼下垂の原因は？

眼瞼下垂の病因ですが、大きく3つに分けられます。

#### ①上瞼の皮膚がたるみ、目を覆っている。

この場合は、加齢に伴い皮膚の弛緩(シワ)が生じている場合がほとんどです。

#### ②上瞼を挙上させる筋肉(上眼瞼挙筋といいます)の力がうまく瞼に伝わらない。

この場合は、加齢により上眼瞼挙筋が瞼に付着している部分(腱膜)が薄く伸びていたり、切れていることが多いです。その他、コンタクトレンズの長期使用や、白内障などの手術後などに眼瞼下垂が生じることがあります。

#### ③上瞼を挙上させる筋肉が麻痺している。

このなかには、生まれつき上眼瞼挙筋の機能が弱い場合(先天性眼瞼下垂)や、上眼瞼挙筋の支配神経である動眼神経の麻痺、重症筋無力症などの神経

疾患などがあります。

### 眼瞼下垂の治療は？

手術療法になります。麻酔は大人であれば局所麻酔で可能です。手術方法は眼瞼下垂の原因によって異なります。まず、切開ですが、傷跡が目立たないように二重の線に沿って切開します。①の皮膚が余って垂れ下がっている場合には、余剰な皮膚を切除します。②の上眼瞼挙筋の瞼に付着している腱膜が伸びたり切れたりしている場合には、腱膜を短く縫い縮め、上眼瞼挙筋の収縮が瞼に伝わるようにします。これを挙筋短縮術といいます。③の上瞼を挙上させる筋肉が麻痺している場合には、「おでこ」にある前頭筋の力で瞼が挙上できるように、大腿の筋膜をひも状に細工し、瞼と前頭筋を結ぶように移植します。これを前頭筋による吊上げ術といいます。

### 術後の経過

眼瞼下垂の手術後の経過ですが、手術の翌日から洗顔が可能です。2週間ほどは瞼の腫れが強くて大丈夫です。片側の手術では日帰り手術が可能です。両側の手術の場合に手術当日1泊の入院をお勧めしています。抜糸は約1週間後の外来再診日に行います。傷跡は二重の線のなかに入るのでほとんど目立ちません。

### おわりに

眼瞼が下がってきてお悩みの方は、お気軽にご相談下さい。その方にあった適切な治療法等について詳しく説明させていただきます。

### 筆者紹介

つのだ ようたろう  
角田 洋太郎



昭和49年生。埼玉県出身。  
平成15年東海大学医学部卒業。  
東海大学医学部外科学系形成外科学 助教。  
付属大磯病院形成外科 医長心得。  
所属学会 日本形成外科学会、日本マイクロサージェリー学会、日本熱傷学会、日本臨床皮膚外科学会。